
悪魔と魔女

茶川紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と魔女

【Nコード】

N03181

【作者名】

茶川紘

【あらすじ】

少女が一人の少年を殺すことで始まるお話。一応伝奇物のつもりな何か。

序章第一話 久遠白のとある最後

目を開けたら、窓には藍色に染まった空が映っていた。

ここは僕の通う高校の教室。僕はここで目を覚ました。あたりに人の気配は存在しない。そんなものだから一瞬、まるでこの世に僕以外の人間が消えてしまったと、そんな有り得ない想像をしてしまった。でも本当にこの世界に僕と云う存在以外が消滅してしまったら、僕はどうするんだろう。発狂するかな。それとも絶望するかな。でもどっちみち、僕はまともではいら

れなくなるんだろうとは思う。そしていつかきつと、死んだように生きるんだ。だから、この世界の人間がすべて消滅するなんて、そんな事にはなってほしくないな、と結局はその答えにたどり着く訳だ、僕は。

『You got mail You got mail』

ん、携帯が鳴ってる。と、あ、家からだ。

「はい もしもー」いい加減にしないと私の拳が唸りをあげて貴方のどってばらにクリーンヒットしちゃいますよ?」し……」

今すぐにでも電話を切りたくなった。が、その衝動を頑張って抑えて(今切ると帰った後に酷い制裁に会うのは目に見えてるからである)とりあえず理由を聞いてみる事にした。

「どうしたの? 透、僕、何か悪いことした?」

電話の相手は透といい、僕の家の使用人、世間一般で言う所のメイドさんだ。

「今、何時だと思ってるんですか? もう七時ですよ? 最近は何だからあれほど早く帰るように言っただけですよ? もう忘れたんですか? 若年性アルツハイマーにでもなったんですか? もういつそのこと隔離病棟に入院し《監禁させ》ますか?」

時計を見ると――七時四分――たしかに七時を超えていた。でもそのくらいで怒る必要なんてないんじゃないかと思う。けどそんな事は決して口には出さない。

理由は二つ。電話越しに聞こえる透のふふふという怒りの籠った含み笑いと、入院と書いて監禁と読む透の素敵な語呂センス。

「それだけは勘弁してほしいな。お願いだから」

「反省してください。で、何でこんな時間まで外に居たんですか」

「……教室で、寝てた。たぶん昼から」

「……あきら……白君」

「……はい」

「……殺人鬼の話、忘れたんですか？」

「………へ？」

何の話？

「最近この街に出る殺人鬼。この間説明したばかりの筈でしたけど……はあ、忘れたんですね。そうですね。そうですね。白君ですもんね。しょうがないですよ。だって白君ですもん」

ん？　なんか変なこと言ったかな？

「まあ良いです。白君に危機感が決定的に欠如してる事なんて、生まれた時から知ってましたから。だからもう一回説明しますからよ――――聞いてくださいね。じゃないと今度こそ、本当に私の拳が貴方のどって腹だけと言わず顔面にもクリーンヒットしますから」

「うん。流石にそれは嫌だからよく聞くよ」

流石に透の拳がどって腹にも顔面にクリーンヒットするのは嫌なので、素直に聞いておくことにした。

透の話はこうだ。

一ヶ月くらい前から、この町には殺人鬼が出ているらしい。まあ殺人鬼と言っても、それは噂の範囲を出てはいないらしいけれど。その殺人鬼にはある特徴があるらしい。で、問題はそ

の特徴で、その殺人鬼は、霧ヶ峰学園と云う中高一貫校の生徒ばかりを狙う愉快犯らしい。そして、僕もその生徒の一人だ。

これが、透の怒る理由、そして、学校に人一人としていない理由だった。

「にしても透、心配症すぎるんだよねー」

どうせ僕が死んだところで、世界は変わらないのに。

ここは片田舎に存在するちょっと大きい公園。中には植物園や釣りができる池がある。

そこに、死体が一つ。

名前は久遠白^{くどうあきら}。性別男。

それは、僕のなれの果てだった。

序章第一話 久遠白のとある最後（後書き）

お目汚し御免！
ですよ。

序章第二話 谷川芙蓉のとある告白（前書き）

人を殺す描写があります。そこまでグロくないつもりですが、見る人によってはグロイ、かも？

序章第二話 谷川芙蓉のとある告白

ああ、気持ち悪い。

ついさっき人間の死体を見てしまった。全身を刃物で切り刻まれている上に、所々皮膚は無いし、骨は飛び出っていて、もう原形を留めていないくらいグチャグチャな、人だった物。

可哀想に、どうせそこら辺の殺人鬼にでも殺されたんだろう。殺人鬼なんてそこら辺にいるし。まさかこの世に存在する殺人鬼が切り裂きジャックの様な、有名な物だけなんて、そんな事などないのだから、きつとそこら辺に、探せば何処にでも居るのだろう。そして殺人鬼は、私の町にも居た。だからこれは、きつとその殺人鬼にでも殺されたんだろう。否、きつとじゃない、これは殺人鬼に殺されたなれの果てだ。

だってこれは、私がやったから。

突然だが告白しよう。私、谷川芙蓉^{やがわふよう}は、殺人鬼をやっている。

今夜でもう六人目だ。中には植物園や、釣りが出来るような池がある、結構大きな公園だった。

いつものように日本刀で背中をぶつ刺して、思いつき引き抜いた。刀には、血と脂がビッシリこびり付いていた。

そのあとも、刺して刺して、何かドロドロしたモノが出てきたけど気にしない。ブスブス刺して、ドロドロ出して、グチャグチャ潰す。いつものように、イツモノヨウニ。目を刺して首を刺して心臓を刺して骨を潰して筋を潰して刺して潰して刺して潰して、その繰り返し、繰り返して繰り返して――――

最後に残ったのは、もはや人間だったのかも怪しい、腐敗臭のす

る汚物だった。

私はその、物言わぬ死体になり果てたものを残して家路についた。事後処理のことは気にしない。それはあいつが何とかしてくれるらしい。

まるでどっかの旅館のような豪奢で荘厳な日本庭園。私の家を簡単に説明するならばこうなる。そう、そんな昔の武士や貴族が住んでそうな、明らかに高そうで無駄にでかい屋敷に私は住んでいる。いや、正確に言うならばその敷地内にある、本館と比べれば小さいとしか言いようがない別館に、なのだけれど。

そのトイレに私は居る。日本庭園のくせに水洗トイレの便座だ。まあボタンでも困るんだけど。

「うげえ」

胃の中の者が込み上げてきた。我慢しないでそのまま吐いた。

[illegible]

ああ気持ち悪い気持ち悪い、とても、とても、気持ち悪い――

!

序章第二話 谷川芙蓉のとある告白（後書き）

色々おかしかったり駄文なのは気にしないでくださいな。

序章第三話 蒼穹のとある思案（前書き）

いつもの様にいつもの如く駄文です。

序章第三話 蒼穹のとある思案

部屋、と呼ぶにはいささか語弊があるここは、端的に言うならばいわゆるトイレ、という場所だ。

そこにはウエーブのかかった金髪をした高校生くらいの少女が寝ていた。まあ正確にはトイレの入り口に、なんだが不衛生感とかそこら辺はあまり変わらないと俺は思う。

少なくとも俺はそんな場所で寝たいとはあまり、いや一瞬たりとも思ったりはしない訳なのだが、まあそれが普通感覚なのだと俺は信じてる。てか、こいつも0.1秒単位の間だろうとトイレで寝たいとは思った事なんてないのだろうけどな。むしろこいつの方が潔癖の気があるから余計だろう。

なのに、こいつ俺を見たとなんに気絶しやがった。

「ま、最近全然眠れてなかったらしーしなー」

まあ、問題はそこじゃねえんだよな。そこじゃ。

だってこいつ、俺を見て笑ったんだ。メチャクチャ薄くて、メチャクチャ歪だったけど、それでも。迷子の子供が帰る場所を見つけた時みたいに、暗闇の中で光を見つけた時みたいに。こいつは、安心して笑った。そんなの、コイツの気が知れねえ。ダイジョブか。コイツ。

「お前は本当に、俺がなんなのか理解してんのかね？」

お前を、地獄より酷い所に送るのにな。俺は。

ま、イイけど。

そうして俺、蒼穹（通称穹）は独り、トイレの前で思案したのであったとき。んーてかこれ（芙蓉）俺が布団まで運ばなきゃいけないんだよな。

序章第四話 クロのとある激高（前書き）

登場人物の考えてることがグロイうえに物騒です。注意。

序章第四話 クロのとある激高

ああ、この気持ちは何と云うのだったっけ――。

目の前にはあの子が転がっている。

私の気に入っている右が白で、左が黒の左右で色が違う瞳も潰されて
いるし、白い髪も血の色で真っ赤に染まっていて、腹からは内
臓であろう、赤黒くてゼリーみたいにプルプルした物が飛び出て、
頭からは脳みそであろう物も見える。一目瞭然だ。こんな疑いよ
うがない。

ああ、君は死んだのか。白。

「あーあ。だから危ないってあれほと言いましたのに。ちゃんと聞
かないからこんな事になったんですよー」

隣では黒い髪に金の目をした喧しいメイドが何やら愚痴を溢して
いる。だがそれには癪だが同意しよう。あれほど夜道は危ないと言
ったのに、その注意を無視してこんな夜中（現在九時）に出歩いて
いるのだから。だけれどその注意を真剣に聞く気はないのだろう。
どんな事になっても。だって君は、どんな死を味わおうとも、最後
の最後まで、

死を恐れる事は、しないのだから。

だから死んだのに、反省も後悔も、君はしないのだろう。

仕方ないので、ここはもう諦めて怒りのベクトルを百八十度くら
い方向転換するでしょう。そもそも殺した方に全面的に責があるの
だし、当然と云えば当然だ。

まあ端からそいつを許すつもりなど雀の涙ほど、否、単細胞生物

の涙ほどもない。つまりはゼロだ。

だってそうだろう、許せるはずがない。そいつの内臓を引きずり出して晒そうとも、頭蓋骨を破壊し、そこから脳みそを取り出してグチャグチャにすり潰そうとも、白と同じ、もしくはより酷い状態にしようとも、私の思いつく限りの酷い拷問の末殺そうとも、許すつもりなどないのだ。絶対に、永遠に、永久に、私はそいつを許しはしない。

だから、あの子を傷つけた事を後悔しても足りないくらいの、餓鬼も、閻魔すらも裸足で逃げ出すような地獄を味わわせてやろう。

待っている人殺し。

私の、クロと云う悪魔の怒りを、腹が破裂するくらいに、喰らわせてやる。

序章第四話 クロのとある激高（後書き）

これで主要人物は全員登場です。

駄文なのは相変わらずだけど、考えることが物騒ですねこの話のヒロイン。

第一章 穹と芙蓉のいつもの早朝（前書き）

微エロ？ まあそこまで、てか全然エロくないけど一応うら若き少女の裸体の描写が出てくるので一応微エロです。

第一章 穹と芙蓉のいつもの早朝

空は晴れ晴れとした晴天。うん、今日は洗濯日和だ。ここまで天気が良いととても清々しい気持ちになる。俺の名前も蒼穹、なんていう明らかに晴れが似合う名前だし、うん、天気が良くて気持ちが良いのはいいことだ。

と、そんなことしてる場合じゃねえな。

「朝食も準備したし。さて、起こしに行くか」

台所から徒歩五秒。チャリで行ったらたぶん一秒かそこら、もしかしたら一秒にも満たないかもしれない距離にあいつ、芙蓉の部屋はある。まあ、チャリで行ったことないから解らんが。てか試したらこの家の家主に殺される、は言い過ぎだろうけど少なくとも半殺しは確定だろう。どのみち、チャリで家ん中を移動するなんて暴挙、掃除が大変だろうからやんねーけど。

「おーい。起きろー。遅刻するぞー」

とりあえず襖を引いて、入口付近で声を張って起こしてみた。

返事がない。ただの屍のようだ。

「なわきゃねーけどさ。おーい今起きねーとマジで遅刻するぞー」

俺はさらに声を張り上げながら部屋に踏み込み、芙蓉の眠る布団のすぐ傍までしゃがみこんだ。

「お前……」

そこには間違いようもなく俺の居候先の家主であり、麗しのご主人様がアホ面晒して寝転がっていた。まあそこまでは良いんだ。そこまでは許容の範囲内だ。

「寝癖が悪すぎる」

そこには、アホ面を晒し（ここまではさっき言った）本来なら上にある筈の布団をグシャグシャにして端に追いやり、こいつが寝巻き十部屋着用にといつも着てる浴衣をはだけさせて眠っている少女

の姿があった。まあ、それだけでも風邪引きそうだし、最近インフルエンザとか流行ってるらしいし十分問題なんだが、一番問題なのはその先だ。さっき言った通り浴衣ははだけている。そのはだけた浴衣から見える景色が問題なんだ。

はだけた浴衣からはささやかな胸はピンク色の何かが見えそうだし（てかちよこつと見えてるし）、股を広げすぎてガニ股に見える股からは何か黒い物体がチラチラッと見える。

これは女子高生として問題だとも思う。

……なに？　これなんてラブコメ？　てかお前下着つけろよ！　年若い女子高生がはしたなえよ！　サービスショット？　そうなのか？　てかこんな色気のねえサービスショットなんて嬉しくねえよ！！

「……………直すか」

流石にこのままじゃ誤解されて半殺しになるのは100%確定だし、浴衣のはだけを直すでしょう。

俺は胸元に手を伸ばした。

「むにゃ……。うるひゃい」

のが間違이었다。

間の悪い事に、目を薄ぼんやりと瞬かせながら、可愛いやら間抜けやらどっちとも取れる声を上げ、

谷川芙蓉は目を覚ました。

「……………」

今の現状を解説すると、目の前には胸元の袖を掴んでいて、見様によっては胸元を広げているように見える俺が一人。

胸元をはだけさせていた、見様によっては胸元を開かれて今から襲われそうに見えなくもない芙蓉が一人。まあつまり、何を言いたいかというと、今の状態がかなり最悪、むしろ極悪だという事で。

「は、はろー……」

「……………」

.....に」

「二？」

「何しとんじゃこの野郎——！！！！！！」

「ぐべらっ！」

叫びながら右の拳でアッパーカット！ ついでジャブ！！

て、痛 《いて》 え！！

メツチャ痛え！！ 何この力！ 寝起きのくせにすっげえ痛え

！

てか袖を直すんじゃ なくて布団をかけるべきだった！

「お、俺の馬鹿……」

この後に待っているのは、地獄まがいの暴力の嵐だという事なのでした。

「いただきます」

芙蓉は気が済んだのか、数分で殴る蹴るの暴行を止めた。

と、思ったらさっさと台所に行き、朝飯を食い始めた。謝れよ。

「てか呑気に朝飯食ってんじゃねえよ。急げ中学生」

現在午前八時。どう頑張っても重役登校確定だ。

「ウルサイ。いつもいつも同じこと言ってよく飽きないね。穹」

「だったらいつもいつも同じこと言わせんな。てか遅刻癖ついたら大変だぜ？ 約束に平気で遅れるようになったら信用をなくす」

休み癖もな。そう付けたしたら、蛸のように口を尖らせた。どっからどう見ても拗ねた。うん、解り易いのは良いことだ。

「別に、行かないとは言っていない」

「でも遅刻する気は満々なんだよな？」

というかもう遅刻だ。

「文句ある？」

「いや特に」

「食べ物が無駄にする気はないし、食事中は三十回以上よく噛んで食べるって決めてるから」

「だから急ぐ気はないと」

「少なくとも食事中は」

「いつも同じことと言って飽きねえ？ 芙蓉」

「だったらいつも同じこと言わせんな」

そんないつもとあまり変わり映えしない会話をしながら食事をし
て、その後三十分くらいしてようやく家を出た。結局着替える時も
急がなかった。そして通学中も急がずに歩いていく事は確実だ。

「さて、俺も行くか」

あまり時間はかからないだろうから、家事の心配はそんなにしな
くて大丈夫だろう。

「さむ」

十二月半ば。雪は降らないが寒いことには変わらない。これも暖
房をガンガンかけている室内に居れば全然寒くも何ともないんだが、
ここは暖房のだの字もない屋外と言う名の公園だ。寒くないはずが
ない。

中には植物園や釣りができる池があったりと、片田舎に存在する
にしちゃあ結構でかい公園だ。いや、片田舎にあるからこそでかい
のか、と考えてみても当たり前のように答えは出ない。

そして、その公園の中には、どこを探しても血痕の跡など存在し
はしなかった。

俺の努力の成果だ。俺頑張った。誰か俺を褒めて。

第一章 穹と芙蓉のいつもの早朝（後書き）

改めてみたらめっちゃくちゃハズイ位駄文すぎる。
間違えて見ちゃった方ごめんなさい。

とりあえず文才が欲しいです。
後集中力。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0318i/>

悪魔と魔女

2010年10月9日23時04分発行